

2011年6月21日の出会い

不思議出会いの花物語…ファーストシーン・薔薇

Moria 著

不思議出会い…その始まり

不思議出会い…？

何か気になりますね。この言葉…。

これからその出来事をお話ししてゆきます。

まず主人公の紹介です。

カメラを肩に掛け、フラフラとあちらへ、こちらへと歩き回る爺さんがいました。彼は、若い頃から飯より写真を撮るのが好きという、根っからのカメラマンでした。

そしてナレーターのボクです。



舞台は、都会のある公園です。真夏の太陽が照りつける暑い日でした。

彼は疲れた様子で日陰のベンチにグッタリと腰をかけています。その広い公園内には、幼い子供を連れて遊ぶ数家族が、シートを敷き団欒を楽しんでいます。

ボール遊びに興じる若者の姿もあります。

彼は力のない目で、その光景をぼんやり眺めていました。すると、どこから現れたのか青い目をした若者がたくましく彼の目の前を走り過ぎて行きました。

その若者の後ろ姿を見ながら彼はつぶやきます。

「あれは何年前やったかな…？」

彼は懐かしそうに青い空を見上げて微笑みました。

「あの時も今日と同じように暑い日やったなあ。こうして疲れた体を休める為に日陰のベンチでポオっとしてたもんやな…」

「ほお、その時も偶然にジジさんの前を誰かが走っていたのですか？」

「そうなんですわ。そろそろホテルに行く時間が近づいてましてな。気持ちがそちらに移りそうになりかけた頃だったのですが、私の前を走っていった若者が気になりまして。それでじっと彼の背中を眺めていると、向こうのほうに赤い花が見えました。」

「その花をジジさんは撮りたくなかった…そうなんですな」

「その通りです。疲れていても、写真を撮っていると元気が湧いてきますからな…」

写真の話になると、ジジさんの目がキラッと光るのを感じます。

ジジさんは重い腰を上げて、赤い花を眺め笑みを浮かべました。足が自然とそちらに向かいます。ところが、花を前にして彼は落胆し、手に持っていたカメラを肩に掛けなおしました。見るとそこには咲き終わった赤いバラがあるだけでした。

「あの時はしばらく足が動きませんでした。疲れがドーンと出てきましたからな」

「分かりますよ、そのお気持ち…。それでその後どうされたのですか？」

「そこからが、不思議な出会いの始まりになるんですよ」

「ほう、それはどんな不思議なんでしょうか？」

彼は違う方向に、大好きなピンクの小さい薔薇を見つけました。

そこには蕾や咲きかけの花、そして丁度綺麗な咲具合の花も混じっていて、ジジさんの顔にも笑顔が戻ってきました。

鼻歌を歌う気分で撮影していました。

「それは楽しいひと時でしたね」



「そうでしたね。ですが、私を呼んでいたのはピンクのバラでは無かったのです」

「そうですか…。その後、何かがあったんですね？」

「ありましたね。ピンクの薔薇を撮っていたとき、どこからか、バラの甘い香りが漂ってきたのです。本当に久しぶりに感じる香りでしたね」

「ということは…」

「そうなんです。その香りが私を否応なく引っ張るんですね。こっちへおいで。おいで…」

「香りに引っ張られた…？」

「そう…もの見事に引っ張られましたね」

ジジさんは香りのする薔薇を探しました。しかし、目にするのは、咲ききった残骸のようなバラばかりでした。

でも甘い香りは益々強くなります。そしてやっと探し当てました。その群れの中でただ一本だけ咲いていた黄色のバラ。

その花から豊かな甘い香りが放たれていました。これぞ「バラの香りだ!!」
「そう感じられたのですね。でも、そのこととバラの花との不思議な出会いと、
どう関係してくるのですか？」

「そこなんです。そのことをお話しする前に、偶然とは面白く不思議なもの
だっことを憶えていて欲しいのです。私にとっては不思議であっても、別の
方にとっては偶然に過ぎないってことです。」

「偶然が偶然を呼び…って言う」

「そう…それですよ」

ジジさんは青い空を見上げて口を開きました。



「その黄色いバラの花は、まさに旬の花のように咲いていました。誰かに見て
欲しくて仕方がないという感じに見えました。
その一群の花はすでに咲き終え、地面に横たわっている姿もあり、この花だけ
が咲き輝いていました。恐らくあの香りが無かったなら、私も気づかずにこの
公園を後にしていたと思います。」

それよりもどうしてあのタイミングで、風が彼女の存在を知らせる甘い香りを運んできたのか…それが不思議なのです。

私が好きなピンクの小花の薔薇を撮影していたその時を、知っていたかのような甘い香り…。それはまるで、私に撮影して欲しい。私の咲き姿を写真に残して欲しいと、誘うかのような香りでした」

「その薔薇の香りのタイミングの不思議さ…だった」

「そう…その通りです」

「それでジジさんは、偶然は面白くて不思議だ。と言われたんですね。ホテルへ行こうと思うと、目の前を誰かが走り抜け、彼の背中を追うと赤い花が目に入った。

そこは咲き終わったバラの群れで、近くに可愛いピンクのバラが咲いていて、丁度その時に風が甘い香りを運んできた。その香りに誘われて匂いに咲く黄色の彼女に出会った…。

偶然が重なる面白さ・不思議さなんですね」

「あの黄色のバラは、あの日が一番輝いていたんだろうね。バラの最も美しい咲き方ってあるでしょう。

あの日のことは今でも忘れることはありません。それは、花の不思議出会いの始まりだったからです」

「ほう…。同じような花との不思議出会いがあったのですね」

「今回以上の不思議さを感じた花との出会いでした」

「聞きたいですね。またいつか聞かせて下さいね」

なるほど…

ジジさんにすれば、風が甘い香りを運んだのに不思議さを感じた。

と言うより、薔薇の花がジジさんを身近に感じ、風に頼んで香りを届けた。ことになるのでしょうかね。

ジジさんの言葉によれば、「花好きな人を花が呼び寄せる」のだそうだ。

でも…ボクにとっては、それはただの偶然に過ぎない。と、思える…

偶然が織りなす「不思議出会いの花物語…セカンドシーン」はどんなものなん
でしょうか？

それは、さらに偶然が連続で重なる不思議出会いになるのでしょうかね。

今度お会いするのが楽しみになってきました。

では、その時にまたお話しますね♪

追記

黄色い薔薇の花との出会いは「東京・代々木公園」だったということでした。

おわり